
これはテンプレですか？ いいえ、銀のプレートメイル略して銀プレです
さんすべりあ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これはテンプレですか？ いいえ、銀のプレートメイル略して銀
プレです

【ZINE】

Z2046Z

【作者名】

さんすべりあ

【あらすじ】

警察官になつて、はや2年。毎日あいをつしてくれる女の子に告つたある日、事件現場で殉職しました。 やっぱりあれは死亡フラグだったのか。 そうだよな、オレが幸せなんてへんだもんな。二階級特進バンザイ（泣）。 生まれ変わった先は、いわゆる剣と魔法のファンタジー世界でした。 ホームズ好きの妖精にとり憑かれつづ、めざせ、魔法警官。 いや、その前に成長しなくちゃだけど。

プロローグ（前書き）

氣樂に書いた「テンプレシリー」ズ第一弾。
もつとも、第一弾とはせんせんつながりません。
独立して読めます。
よろしくお願いします。

プロローグ

通勤通学の皆さん、駅や学校に向かつて行き交っている。

そんな中、オレは一日おきに交番の前に立つ。市民を見守るのは、警察官として大切な仕事である。

「見守るつていうか、見てんのは冬ちゃんだよなー？」

先輩がからかうが、オレは固い表情を崩さない。崩れない。崩せない！

手には汗がダラダラ。

緊張で顔は硬直。

……すがすがしい朝日の中、自分が一番不審人物なのは自覚している。

「おは、来たぞ」

先輩が、ドンと背中を押した。よろけるオレに代わり、見張りを勤め始める。

「おはようございます」

いつもと同じ笑顔が田の前にあつた。

江上冬さん。天然ぽやぼやの、鷄^{だま}されやすそうな1年生。背が小さいので一見中学生だが、彼女の制服は南東北高校、通称西ナシ高のもの。

しかもオレは平日毎日見ているので、お子様と間違えるはずもない。

ん？ なんで毎日？ 非番があるだろつて？

甘いな。オレは休みでも朝来ているのだ。彼女の挨拶^{あいさつ}にはそれだ

けの価値があるー。

「あ、おおよひいひやります。あ、あの」
ナゼか敬語。しかも返事が上ずつてしまつ。

「お、お話が……。け、ちょっとこちらに来てもらひますか
「え。私、警察に取り調べられるような事しました?」

本人は不思議そうに手を丸くしただけだったが、周りがざわめいた。(えー何なに)(万引き?) (スマホで撮つとくか) など、予想外に不穏な方向へ進んでいく。

まずい。このままでは、オレが冬さんを無実の罪に陥れてしまつー。

オレは覚悟を決めた。

「ちちち違つんです。話とこののは、つまりですね、ももももじよ
ければ本官と付き合つてられー。」

今度は、ねおつじよめきが上がつた。

よし、冤罪回避。

それはいいのだが、告白したのは初めてだ(された事はナイ)。頭に血が上つて、立ちくらみのようになにクラクラふらふらしてくる。もういい。言つだけ言つた。我が生涯に一片の悔いナシ。だから、断るなら早くして欲しい。

さすがにここでブツ倒れるのは恥ずかしいので踏ん張つてみると、冬さんは困った笑顔になつて首をかしげた。

ああ、やつぱりな。

町内おばちゃんたちの噂では彼氏はいなつてハナシだったが、

そう上手くいくわけがない。いつでも来い、と覚悟はするが、オレの肩はガックリ落ちていた。

頼むから、優しく断つてくれ。キモイとか言うのなしで。本気でへこむから。

「あ。違うんです。お巡りさんはいい人だと思います。挨拶してくれますし。ただわたし、よく知らないから、あの、お友達からいいですか……？」

遠慮がちに訊ねる姿は、地味だが可愛い！

「はい！ では自己紹介をさせていただきます。本官は西岡勇太郎といい、現在20歳。貯金ナシ彼女ナシの不甲斐ない男ですが、剣道は全国大会で入賞の腕前です！ ゼひ冬さんを守らせて欲しいのでありますっ！」

あ、また敬語になってしまった。

しかもあんまり嬉しかったので、彼女がいつも乗る電車が行つてしまつたのに気付かなかつた。

それでも冬さんは怒らずに慰めてくれた。

少しだけ話をして、携帯の番号とアドレスを教えてくれた。

なんていい子だ。

オレは幸せな気持ちで業務を始め

昼に発生した強盗事件で、犯人に撃たれて死んだ。

やつぱり今朝のは死亡フラグだつたのか。 そうだよな、 オレが幸
せなんてへんだもんな。 二階級特進バンザイ。 しくしく。

セイジ - 言。

「なんじゃ いりや あああつ (by 太陽にほえり) 実物見たことな
いけど」

そんで。
転生した。

プロローグ（後書き）

……タイトルの『鏡のプレートメイル』にたどり着くまで長いかも
です。
できれば、気長にお付き合いいただけると嬉しいです。

1 乳幼児

そんで。
転生した。

なんか、あの世で閻魔^{えんま}大王に会つた氣がする。
あと、いらないオマケをそのままくつつけられたのは覚えてる。
ラック値の欠けているオレを憐れんで便宜を図つてくれるなら、
オマケじゃなく冬さんをギブ。

……冬さん。もう会えないんだ。

生まれた直後はそれが悲しくて大泣きした。しばらくたつてから
も男泣きに泣いた。

だつて始めて女の子と付き合^えそ^うだつたのに。まあ、オトモダ
チからだつたけど。

恋愛理由で泣く赤ん坊つてどんなどよ、と自分でも思つが。
悲しかつたんだから仕方がない。

それはともかく、生まれ変わつても現代日本の基礎知識は残つて
いた。

有効そなとこりで、「海外派遣編・井戸の作り方」や「サバイ
バル」「野草・薬草」。

警察の試験に落ちたら、自衛隊に応募しようつて思つていたので読
んでいた。

これをチートといふのだらう。
剣と魔法のファンタジーな世界でも通用するはず！

自分で歩けるまで、死なないでいたらね。

それが目の前の問題。

実は、恋人未満の冬ちゃんと死に分かれたのを泣いている場合じ
やないのだ。

オレは生まれてこのかた、満腹するまでミルクをもらつた事がな
い。

母の乳の出がよろしくないのだ。中世ヨーロッパ風の社会では農
民の地位がめちゃめちゃ低く、そして父親と母親は完璧な農民デス。
という事で、命の危機。まつたり寝ていられないオレは、驚異的
なハイハイを身につけた。

「きやー、マグナスつたら何してるの」
姉が叫んでいる。ちつ、見つかったか。

洗濯物を放り出して追いかけてくる姉から逃れるべく、方向転換。
數^{やぶ}に隠れて匍匐^{ほふくせんしん}前進なんてして余裕はもうない。直線で、目標物

【たんぽぽ】！

花をぱくつとやつたといひで、姉に捕まつた。

「食べちゃ 駄目つ

べしつと、犬が食べちゃダメな物を食べた時のようにほたかれた。
しかし飲み込んで、次はヨモギに手を伸ばす。むしって口に入れよ
うとすると、姉が手を押さえて、拮抗^{きつこう}にらみ合つ。

「あー（少量なら、赤ちゃんでも平氣だと黙つたが）」

「あー、じゃないの！」

「だー（本当はてんぷらにすると美味いんだけど）」

「だー、でもなくて！」

オレは姉の腕の中で、ひょいと態勢を入れ替えた。

柔らかい体は、丸くなるだけで簡単に腕の下へ落ちる。姉はびつくりして手を離したので、ヨモギを飲む。あとはクレソンだな。川近くまで、高速ハイハイ。

歯がないので前二つは食べにくかつたが、これは歯茎ですり潰せた。うん、けつこう平氣に食える。

座りこんでむしゃむしゃやつていと、姉が膝を抱えて泣きだした。

「……」めんね。お腹すいてるのよね。うしが貧乏だから。ごめんね

「……」

オレはクレソンを摘むと、姉の前に這いつて差し出した。腹が減ると、大人でも泣きたくなるよな。

「あー（サラダに乗つてるヤツだから）」

鼻をすすりながら顔をあげた姉は、ぱくっと食べてくれた。

2 幼児。

親は朝早くから起きて畑の世話をしているので、子供のオレを育ててくれたのは兄と姉である。つーん、お百姓さんつてHライ……といふか、たいへんだな。

農業用機械の原理も覚えてくれば良かつたと、後悔。

「……」

よし、後悔終了。

できる事からガンバロウ、って標語もあつた氣もするし。まずは毎朝飲み水を汲みに行く姉のため、井戸にポンプを取りつけよう。水汲みは重労働なのだ。

満一歳にしてハイハイを卒業、先日から一足歩行を始めたオレは、よちよちと井戸に近寄つて行つた。

「あらマグナス。ケイトはここじやないわよ」

「あー（知つてゐる。川にクレソンを取りに行つた）

オレが異常にクレソンに執着するので、このじろ姉は血発的にクレソンを摘みに行つてくれる。塩だけで簡単おひたしになるので、空腹な家族にもギリギリ好評のラインだ。

それにして、なんでここの人たちつて野草食べるの嫌がるのかな？

おかげが一品増えたら嬉しくない？

それはともかく、じーつと井戸を見ていたら、広場が騒がしくなつた。

「何があつたんだい？」

水を汲んでいたおばさんが、ざわめきの方へ大声をかける。

「イノシシが出たんだって。男衆が倒したつてよ。今日は焼き肉よーつ」

焼き肉！！

オレは立ち上ると、一生懸命広場へ走った。
まだ頭がでかすぎてバランスがうまく取れず、一歩「」と右へ左へ
揺れるのは大目に見て欲しい。

「だー（にーちゃん）」

近付いて行くと、先に来ていた隣のおばさんが抱き上げてくれた。
イノシシ獲つたどーな浮かれ騒ぎだけでなく、もつと切羽つまつた動きもある。

「ヨシュアがケガをした！ 森の治療師を呼んで来い！」

「木地師が森でケガなんて、他に獣が出たのか？」

「いや、元から体調が悪かつたらしい。手負いのイノシシにやられただけだ」

ほつとした空氣と緊張が交錯し、慌ただしく何人かが走っていく。

「こんなとこに来て、危ないじゃない。踏まれちまつよ」

「あー（ありがとう）」

オレの気持ちが伝わったのか、おばさんはぐりぐりと頭を撫でてくれた。どういたしまして、と言いながら兄へ近寄る。

「ジョージ、マグナスがあめでとうつてわ」

「おう。見ろよ、マグナス。兄ちゃんが獲ってきた、久々の焼き肉だぞ」

兄ちゃんサイコー。

もちろん肉は大好きだ！

きらきら目を輝かせたオレは、盛大なよだれをたらして集まつていた人々に大笑いされた。

「おまえん家の弟、ホント食い意地が張つてるよな。草喰うんだろ？」

「うー（クレソンをばかにするな。整腸作用だつてあるんだぞ）！」

「ジョージも狩りに参加したし、ロバートの家のばいところを切り分けてやれ」

両手を振り回すオレの抗議に笑つた村長は、肉を解体しているおじさんに声をかけてくれた。

村長、なんてイイ人なんだ。

いつか恩返しさせていただきます！

オレがきやつきやとはしゃいだので、村人はまた大笑いした。

夕食にはもちろん肉が出た。

もちろん付け合わせのクレソンも。

「マグナスのおかげで、いいお肉がもらえて良かつたわねえ

「そうだけどさ。母さん達、そもそもオレが狩りに参加してたから

だつて、覚えてる？」

「お兄ちゃんつて、^{おじい}囮？」

「それはハル。今年のオレは弓使いだ」

「ほつ。当たつたのか？」

「もちろん」

珍しく食卓が賑やかだった。

まだ歯のないオレは一かけらをしゃぶるだけだったが、充分に乐しかった。

保存分の肉にハーブと塩をぬって、家族を呆れさせたくらい楽しめた。

肉に浮かれ過ぎてポンプをすっかり忘れていたのは、ベッドに入つてから思い出した。

3 マグナス最初の事件簿1（一歳半）

木地師のヨシュアがケガをしたと聞いたので、オレは見に行つた。今日も頭が大きくて、歩くたびによじよじと左右に揺れる。ああ情けない。早く人間になりたーい。

「おや、お見舞いに来てくれたのかい」

ヨシュアの母親が、ドアを開けようと背伸びしていたオレに気付いて中に入ってくれた。

「あー（大丈夫か？ 具合はどうだ？）」

兄と同い年のヨシュアは、床に座りこんだオレを抱え上げてベッドの上に座らせた。

「いて……。お前、ホントおもしれーなー。うちのアリアなんて、お前より半年早く生まれてんのに家の中這うのが精いっぱいだ」

「むー（それが普通だ。それより、ケガは？）」

答えはなく、頭を撫でられた。

こいつは姉と違つて、こっちの言いたい事を分かつてくれない。仕方ないので、足からはじまつて肩までペシペシ叩いてやつた。ヨシュアは太腿ふとももと腹のところで思い切り顔をしかめた。

ケガはそこか。

シーツを剥いだら、シャツやズボンにまで血がにじんでいた。

特に太腿が問題。うわ、そこ動脈の近くだ。あぶねー。一步間違つたら、出血多量での世行きだ。

「……？」

オレは腹側の、血と共ににじんでいた膿うみに鼻を近づけた。

傷は小さいが、スゴイ臭いだった。

太腿はまだ腫んでないのに。

たつた一日でこんなに酷くなるはずがない

*

「……」

オレは薬になる草を探して村の囲いの外へ出た。目当ての白い花はすぐ近くに咲いていたが、不幸にして背が届かない。まったく、全然、背伸びとかジャンプとかも無理。論外。

なので、オレは今のオレにできる手つ取り早い方法をとつてみた。つまり。

号泣。

びええええ
き叫ぶ。

つと泣く。肺活量限界まで、泣

やがて、声を聞きつけた姉が走つてきた。

「マグナス！」
「うー（ごめんな姉ちゃん）」
「……」

けろりと泣きやんだオレは、木の幹にしがみついて叩いた。

「……登りたいのね？」

うなずく。

姉は、あきらめの境地で枝に乗せてくれた。幸い体重が軽いので、枝の先まで行つてもしなる程度だ。オレは一塊りになつて咲いている花を採り、姉の肩に降りた。

「また食べるの？」

首を振る。

「あら珍しい。じゃあ、どうするの？」

「あー」と、オレは肩車のまま家を指さした。

走りうとして、転んだ。

この使いにくい体、どうにかならないかな。

普通のこじもなら大泣きするところを、オレは腹をたてつ起きでペチペチ鍋を叩く。

もはや一歳児とも思えぬ奇行に慣れた姉は、鍋に水を入れて暖炉の火を起こしてくれた。

「やっぱり食べるんじゃない

「うー」と首を振る。その間も、瓶をとってきて姉に渡す。

「……洗うのね？」

ため息をつかれた。

気にするなって。物分かりのいい姉を持つて、オレは幸せだ。

4 マグナス最初の事件簿2（一歳半）

助手を最大限に活用して、瓶を熱湯消毒し、採ってきた花をつっこんだ。家にあつたミントも。

その上で、瓶に炭酸水を注ぐ。

本当はアルコールと蜂蜜も入れたかったが、高いので無理。ちなみに炭酸水は、山のふもとまで行くと汲める天然物である。温かかつたら炭酸温泉になれるのに、残念ながら冷たくて入れない。胃腸病に効くので、どこの家でも汲み置きがある。

「食べるんじやなくて、飲むの？」

「ふー（よつぽどオレって食いしん坊のイメージ？）」「

オレは一度頷き、それから首を振った。ああ、めんじくさい。明日から发声練習でもしようかな。

今からでも普通にしゃべれると思うけど、家族や村人に慣れてもらわないといけない。

「あー（とらあえず、片付けて）」

瓶詰の白い花　　アンゼリカという

にフタをし、オレは姉を見上げて棚を指さした。

「はいはい」

心得た姉は、埃のない場所にかたづけてくれた。

「で？」

「う（終わり。ありがとう）」

ペニシリと一礼すると、腰に両手をあてて偉そうだった姉が笑いだした。一歳児が手を揃えておじぎするのが、彼女のツボらしい。

……アンゼリカの薬ができるのは、早くて明日だ。
暇ができて、オレは考える。

「うして姉の家事を邪魔するのは良くない……あ。 そうだよ、だから井戸にポンプつけようと思つたんだ。 忘れてた。

オレは姉のスカートを引き、外に出た。 地面に図面を書くと、姉が上からのぞき込む。

「なんの絵？」

オレは井戸を指さした。

それから図面の取つ手部分を示し、ゼスチャーしてみる。 図面の口から水が出るのも描き加える。

「……水が、出るの？」

さすが姉ちゃん、これだけでよく分かつたな！

オレは拍手したが、姉の顔色は悪かった。

真剣に肩に手を置かれた。 なに、一歳児にマジ説教ですか？
「マグナス、みんなで使う物にいたずらしちゃダメよ。 いいえ、いたずらどころじゃないわ。 そんなの見つかったら、教会になんて言われるか。 異端者だと思われたら殺されるのよ。 いい？ 絶対にこんなのは描いちゃダメ」

……え？ ええつ？

なにそれ科学ダメって事？ 魔女狩り逆バージョン？

ぎやー、いやだー。 まだ子供だし、ろくな抵抗もできないぞ。
怖くなつたオレは、カクカクと何度もうなづいた。

姉の手伝いは、他の事でしよう。 それに考えたら、真空状態にできるだけの技術がオレに無かつたしな。

で、次の日。

「「んにちはー」

「まあ、今度はケイトかい。ヨシュアのために悪いねえ」

「いいえ、昨日はうちのチビが勝手にお邪魔しちゃって、こいつちこ
そごめんさない。それで、これ、差し入れしてもいいかしら」

姉は、アンゼリカの瓶詰を差し出した。

「なんだい？」

「『魔女の靈薬』つていうんですって。魔を退けて、病氣を治すお
薬」

仰々（ぎょうぎょう）しい名前に、おばさんが目を丸くした。

「なんだってそんな物。治療師でさえくれなかつたのに」

「マグナスが」

おばさんの視線が、スカートの影になつていたオレへと降つてき
た。

微妙な沈黙。

「大丈夫。塗り薬とかじやなく、飲み物なんですって。あたしも飲
んでみたけど、美味しかつたわ」

「ああ！ 飲み物か、なるほどね！」

一気に明るくなつたおばさんは、木製コップを持って来てくれた。
もちろんヨシュア作だ。

……疑われたり怖がられなかつたのはいいんだけど、ナニこの落
差。なんでオレ、食糧ネタだと大笑いされんだ？

5 マグナス最初の事件簿 3（一歳半）

ヨシュアは、まだベッドで寝ていた。
昨日より膿の臭いが強くなっている。

オレはベッド、ぬじよじよじ登った。おばさんがヨシュアが
身を起こすのを手伝い、姉がアンゼリカ抽出液を入れたコップを差
し出す。

止血・鎮痛・抗炎症などの効果があるので、飲まないよりマシだ。

これでオレのチート能力が物質生成なら、いくらでも即効の現代
的医薬品が作れるのだが、あいにくそんな気配はゼロにもない。

これでガマンしてもらおう。

ちなみにナゼこんな知識があるのかといえば、警察で勉強をせら
れたオマケである。

あれはあれで面白かった。

一クラス分の警官が集められて勉強するのだが、基本、一蓮托生。
一人落ちたら、みな追試。なので嫌でも結束する。その必要もない
のに、全員でアタマを坊主に剃り合って笑い合つた。

オトコの友情、昭和篇じゃないよ？

はーとうまーみんな職業系ひゅーまんぢらま。

というわけで、この世界でだつたら暗黒社会で暗躍できるくらい
に麻薬覚醒剤その他を知つてゐる。

コカインはもともと植物の抽出物で、現地人の滋養強壮のお茶だ
った。クスリと薬は紙一重。そんなところから、植物方向も暗記し
てゐる。

自分で言つのもなんだが、オレが警官志向の人間でよかつたと思う。

それはさておき、ここまで膾がひどいとちょっとなー。

この村だと、酒場に行つたつて高濃度のアルコールなんて無いしどうするか。

シーツを剥いで座りこんだオレは、シャツをめぐつて腹の傷の前で腕組みした。

腕組みする一歳児つて……いや、今はそんな事いつてる場合じやないのだ。

始めて傷を見た姉は小さく悲鳴を上げ、おばさんは沈痛につつむいている。村人の死因はだいたい病氣かケガで、この手の傷が元で命を落とすのを、大人は皆知っている。

「あー」

「マグナス？」

「いー、うー。えー、びー、しー、でー」

発声練習をしたオレは、子供特有の甲高い声にびっくりした。うわーウイーン少年合唱団。この世界にないけど

「あーあーあー」

「マグナス、ちょっと」

姉が慌ててオレを抱えて出ようとすると、オレはびしりと片手を立ててストップをかけた。もはや一歳児の域を越えているが、だつて放つておいてヨシュアが死ぬの嫌だし。

つか、姉、今すぐ椅子に座つて寝てくれないかな。
メガネな少年探偵・湖南みたいに副音声でお送りできるの。」

「 「 「 「 ……」「 「 「 「 「あーう?」

純粋に幼児なアリア以外の無言が落ちた。

実はちょっと期待したのだが、姉が寝てくれなかつたので、オレ
はさつさと諦めた。

「ワタシは紙です。この子の口を借りて騙りましょう」
かた

「な、なに突然」
ずさささささと、姉とおばさんは抱き合つて壁際に張りついた。
ヨシュアも冷や汗をダラダラ流している。

いいよ別に信じなくとも。
建前が欲しかつただけだし。

「傷は治せマス。あなたが正直に告白するなら。太腿ふとせももの傷はイノシ
シ退治でできたものデスが、この腹のは違いマスね」
おばさんが息をのんだ。知らなかつたんですか、ふーん、ヨシュ
アは家族にも隠してた、と。

「いつ、どこで、誰にやられマシたか」

「……先週の土曜日に、森で。誰かは分からぬ、いえ、分かりま
せん」

敬語になるなんて、信じたの? オレの紙サマ。

それはさておき、土曜日は安息日。教会からの通達で、仕事をし
ちゃいけない日になつてゐる。

隠すんだから、ヨシュアは森で木工の仕事してたんだな。

「大丈夫、言いません」

逆魔女狩りしてゐる教会に、禁を破つたなんて知られたら怖すぎる。

それに、ヨシュアを殺しかけた犯人つてうちの兄だよ…。

何してんだ兄ちゃん！

オレは腐つても元警官だ。焼き肉の誘惑があつても肉親でも、涙をのんで告発するぞ。

小さな傷は、膿んで崩れて形が分からぬが、広く斬られていな
いのだけは確かだ。残るは、刺すか、突くか
射るか。

兄は森で『』の練習してたし。

慣れてる他の『』使いが「つかりするとも思えない。

「答えてくれて、ありがとう。おかげで犯人が分かりマシタ。ジョ
ージです。後で謝罪に寄こしますが、示談で済ませてもらえると助
かりマス」

言った瞬間。

ぽんつ、と煙が湧いた。

『事件解決おめでとうございます！　お久しぶりです、マスター！』

帽子のかわりに小さなティアラ。ドレスの上にインヴァネスコートを羽織り、右手にパイプ。

金キラの髪を頭の横で二つに結び。
きわめつけは背中の羽。

もはや何からツッコんでいいのか分からない、手のひらサイズの妖精がオレの鼻先に現れた。

ホームズ好きのフェアリー・プリンセス。

これが閻魔大王が、前の世界から引き続き（特別に？　面白がつて？）くつづけてくれたオマケである。

あせんとする姉たち。

『だろうな。オレだって死ぬ前の世界でコレに出て来られた時には、自分の正気を疑つた。』

『きやあ。マスターつたら、かつわいいー。こんな小さくなつちやつてー』

『可愛いとか言つな。それより、解決したからな。願いは、ヨシュアの傷を治すこと』

『うわーん。一年以上会えなかつたのに、マスターが冷たーい
『冷たいのは室内からの視線！　わざとあるー！』

はーい、と頬を膨らませた妖精は、ぱちんと指を鳴らした。

音と共に、本人と傷が消えた。

残されたのは、呆然とする姉とおばさん、全身すり傷一つなくな
ったヨシュア。

オレはといえば、知識以外のチートがこんなだつたのを嘆くだけ。

……あ、紙サマの演技わすれてた。
ま、いいか。

そんなの気にしてる人、誰もいないしな。

6 ホームズ好きの妖精つて一体……。

思い出したくもないが、妖精との出会いは死ぬ前の現代一ツポン、警官として初手柄の時だった。

「三島東里、22時18分、強盗の現行犯で逮捕する」

数ヶ月続いた連續強盗の犯人を、ぎりぎり間に合って捕まえた。犯人も犯行も予想できていたが、まだ新米で、自分の考えに自信がなかつた頃だ。

あまりに自信がなさすぎて、上司どころか面倒を見てくれる先輩にすら言えなかつた。トイレに行くふりでこそつと抜けて、一人で行つたら、本当に出くわしてしまつたという間抜けっぷり。

（うわーどうしよ。おーこーらーれーるー）

何事もなかつたら「長かつたな」「下痢です」で済むが、これは。なので、犯人は少し驚いてかかつて來たが、オレはそれ以上に驚いていた。

条件反射で取り押されたのはいいものの、頭の中はマッシュロ。

言つべき事や手順もすべて忘れた。

被害店舗で、粘着テープで巻かれた従業員と、とりあえず手錠だけはかけた犯人を前に、ただひたすらマニアカルを思い出そうと頑張つていたんだから、我ながらどうしようもない。

「……あんた一人だよな。こりこりの、許可されてねーよな。無効

じゃね？」

そんなどつたので、犯人にまで搔さぶりをかけられる始末。

「え、いや、現行犯だから大丈夫。そのはず。他の、今までの分は、取り調べで分かるはずだし」

汗だくビクビクで拳動不審に言つ姿は、犯人より怪しかったと思う。

「他のなんて知らねーな。つか、三島つてダレ」

「お前だろつ！ 言い逃れようとしても、ムダだ。オレが思つに……」

自信のないまま手口や潜伏方法などを説明していたのも、思い直すと恥ずかしい。一時間サスペンスじやないんだから、ありえない。

オレは船越一郎か？

ここは東尋坊とうじんぼうか！？（海に突き出た“ざっぱーん”な崖）

勝手に突つ走つた事もふくめ、イレギュラーばかりである。

そんな赤つ恥な説明を終えた時だつた。

ぽんつ、と妖精が目の前に湧いて出た。

『きやー本物ホンモノ！ 名探偵見つけたつ』

「…………」

その時の犯人といつたら、表現しようのないキヨトン顔だつた。

いい歳した男のするもんぢゃない。
情をしてたけど。

もちろんオレも同じ表

だが、ある意味当然だと思う。

だって、手のひらサイズの女の子（羽つき）ってだけでもおかしいのに、その服装がドレスにインヴァネスコート。片手にパイプ（しかも空^{から}。刻みタバコは入っていない）。

ホームズファンの勘違いコスプレ?
それとも妖精的には正しいのか??

それ以前に、妖精つているんだな……。まずそこからビックリだよ。

『ステキ！ ねえ貴方^{あなた}、私のマスターに任命してあげる。貴方が一つ事件を解決するたびに、願いを一つ叶えてあげるの。嬉しいでしょ？ どう、何か欲しい物とかある？ 私ができる範囲で言ってみて』

「消える」

白昼夢を見ているヒマはない。

犯人をしょっ引かなければならぬのだ。

オレは目をつぶつて頭を振る。次に目を開けた時には、妖精は消えていた。

「ふつ。この状況で夢みるなんて、オレも余裕だな」
強がつて棒読みで笑うと、

「…………夢、か？」
ぼそりと犯人が訊いた。

抵抗する気をなくした犯人と帰つたオレは、署内の全員に本気で怒られ始末書を書かされた。

職務規定に反したのだから、仕方ない。

それは反省する。諦める。諦められる。

諦められないのは、あのとき妖精に「消えろ」と「願つて」しまつた事だ。

願いは叶えられ、契約は成つた。

オレは不本意ながら、完璧にとり憑かれてしまつた。

死んでからも契約は消えず。

そして今に至る。

ところで、一言いいか?

オレ、警官であつて、探偵じゃないんだけど。

どうしてあのフェアリープリンセスは、根本的なところでいい加減なんだろう。

7 vs・森の治療師 1 (一歳半) (前書き)

読んでくださっている方、ありがとうございます！
前作にくらべアクセス数、お気に入り数が増えて驚愕。
感謝です！

兄ジョージは、自分の「練習がコシュアにケガをさせ、イノシシに引っかけられる原因になつたと知つて真っ青になつた。

しかもケガをさせたのが安息日。

「安息日とは、かつて魔人の奴隸となつていたヒトが勇者に率いられ、6日間の反乱の末に勝利した史事に由来するのじゃ。勝利の7日を、労働から解放された聖なる日と定めて祝福する」

ケガの根本原因が明らかになつたため、村長が説教をしている。

「あ～（どこ）の聖書バナシだよ。どんだけ伝言ゲームしたら、こんなに曲がるんだよ）」

ツツコミを入れたいが、（どこ）で紙サマを演（や）ると後が面倒なので、幼児語続行中だ。

「今は教会の戒律も緩（ゆる）くなり、労働をしてはいけないとされているだけになつたが、本来は家事すら行つてはならない日だつた。そんな日に仕事をし、弓の練習をするなど言語道断」

うーわー。今で緩いの？

魔女狩りされると脅された身では、信じられない。

オレは聞いているのも嫌になつて、広場で聞いている人々の輪から抜けだそうとした。

が、姉に襟首をつかまれて引き戻される。

「うー（はーなーせー）」

「ダメよ。殺されたくなかったら、ちゃんと聞いておきなさい。街に行かないと教会がなくて、村でこうこう常識を教えてもらえる機会は少ないんだから」

「むー（そんな常識いやだー）」

ジタバタしていたら、いつの間にか説教がやんでいた。

あ。そんなにうるさかった?

逃亡はやめないが、他人の迷惑になるのはよくない。慌てて黙つたが、原因はオレじゃなかつた。

場は緊迫する一方。

細い体を黒の服で包んだ、地面まで伸びた白髪の老婆が、杖をついて広場へと歩いて来ていた。

おどき話そのまんま。

あるいは学芸会。

治療師だ、と誰かがささやいたが、言われなくとも一目で分かる。

お約束としては、こうこうお婆さんこうき使われている可愛い女の子がいるはずなのだが、残念ながら見当たらない。

治療師は広場に集まっている村人を見回した。

「教会が認めた医者や治療師以外に、治療行為にかかわってはならない。お前ら、知つておう」

しわがれた声も、細められた目も、いかにもヘンクツ。

ついでに老婆の言いたい事を理解して、オレはさつき逃げられな

かつたのを悔んだ。

「『魔女の靈薬』を作ったのは、お前か」
老婆は姉を見たが、村人の（かわいそん）という視線が全員オレに向かっていたので、オレの前に立った。

「こっちだと！？」

なんか文句あるか。

「まだ赤子ではないか」

「おー（いえーす）」

すっとぼけて、何も分からぬ子供らしく、かわいらしい演技で手足を動かしたのだが無意味だった。

「まあ、いい。それが本当ならたいしたもんだ。罰は『えない』でおくよ。だからこっちに来な。アタシが引き取つて育ててやろ。何といつても、この周辺には他に治療師がいないからね。後継ぎが必要なんだ」

ちょっと待て。人の将来を勝手に決めるな。
せめて考える時間をふりーす。

連れて行こうとした老婆の手をかわし、オレは右へ左へコロコロンと転がつた。追いかける老婆。フエイントを織り交ぜて逃げるオレ。

「こいつ」

「あー」こりん。

「待て」

「うー」こりん。

「待てと言つておるだろ？がつー！」

田の前の地面に、サンダー雷撃サンダーがドッカンと落した。待てコラリザーちゃん、子供に魔法攻撃するなよ！

「エルドハムにこの人ありと言われたアタシを、本気で怒らせるんじゃないよ。さつさとおいで」

ナニその悪人なセリフ。

人わらこは許さんぞ。被害者が自分なら尚更なおさらだ。

「うーー！」

オレは見ようり見まねで空を指差し、振り下ろした。

ぴりつ

と、雷サンダー→0.2くらいのが降つてきた。ほとんど静電気。老婆の髪の毛が逆立つただけ。

つつかえねー！

オレは敗色を悟るとすぐに転がつた。

予想通り、今までいた場所に雷撃サンダーどっかん（再）。

あつちは→3くらいか。当たつても死なないが、般若な形相で髪の毛逆立てやられると、かなりコワイ（いや、髪の毛に関してはオレが原因だけど）。

こうん。どうかん。こうん。どうかん。こうん……

先に息を切らしたのは相手だった。

ふつ、一歳児をあなどるな。

悪役風に一ヤリとし、調子に乗つたオレは老婆の足にタックルをかました。

尻もちをついた治療師は杖でオレを殴りついたが、その頃には
ターボ付き匍匐前進で離脱完了。
勝つた。

対戦カード・オレ対治療師は、オレの素早さ勝ちで終わった。息を切らせた老婆はさておき、周囲では、村の人たちが何やら遠巻きにこっちは見ていた。

「あー（どの辺が問題）？」

「ペたんと地面に座り込んだオレが首をかしげると、マグナス！ 魔法なんて教えてないのにどうして。ケイトお前かい？」

走ってきた母がオレを抱き上げ、抱きしめた。

「うー（姉ちゃんは関係ない。治療師のばーちゃんがやつてたのをマネしただけ）」

姉が通訳すると、村人に微妙な空気が広がった。

忌避ではない。

もう少し複雑で、（うちの村だから仕方ないか）とか（そういうのもあるかもな）とか、そんな雰囲気。

なんですか、実はここ魔法使いの隠れ里ですか。

反対側に首をかしげて母と姉を交互に見ると、二人は揃つて村長を振り返った。

ヤギみたいな白ひげの村長はつなぎいた。

「ここは中興の祖ガウリュディケを助けたアルフの故郷エルドハム。他に比べれば、魔法の素地はある。お前たちも自身で知つておるだ

るつ。この程度なら問題はない」「

説明され太鼓判を押されて、安心が広がった。

話の流れからいつて、アルフってのはこの村の出身の大魔道師なんだろう。

彼は（たぶん）王様のガウリュディケを補佐して国をまとめた。で、実は他の村人も多かれ少なかれ魔法の素質がある。

ショーゲキの事実である。

郷土の誇りじゃないか。そんな凄い人がいたなら、寝物語に聞かせようよ。

そう思つたが、オレ以外にも不思議そうな顔をしている子供もいて、あまり大っぴらに語られるものではないのだと察した。

ふうん、と考えていると、少しばかり忘れかけていた治療師が汚れを払つて立ち上がつた。

「アルフがなんぼのもんかね。必要なのは大昔の魔道師じゃなく、生きてる治療師じゃないのかね。その治療師が村の将来を心配してやつてゐるつてのに！ お前たちは何にも分かつてないね！ いいよ、こんな乱暴な子、頼まれても仕込んでやらないよつ。教会にも言つとくから、覚悟しな」

老婆は怒つて去りかけたが、姉が立ちふさがつた。

「待つて下さい。あたしじゃダメですか。マグナスの姉です。この子の言いたい事も分かるし、ヨシュアにあげた靈薬作りも手伝いました」

「うわ、なんでいきなり姉ちゃんが。

「うー（なりたいの？ 手に職つける気？ そつじやないなら、底
われても困る）」

「底つわけじやなくて」

でもきっと、積極的にやりたい仕事じゃないんだろうな。森に引
きこもつて薬草探しと薬作りつて、おしゃべり好きな女の子にはキ
ツイはず。

それにオレは、治療師がいやなわけじゃない。村に必要ならやつ
てもいい。

ただ、向き不向きつてあると思つ。オレは治療師になつた未来を
想像する。

成功例：知識を総動員して、画期的治療法を確立。村を一大医療
センターにしちゃう。ココココココ。

成功例別バージョン：過疎地をやがて医療系ヒューマンドリーム。
自転車こいで往診しよつ。

どちらも悪くないけど、唯一にして最大の問題がある。

実はオレ、器用じゃない。

器用じゃない外科医つて、患者にとつて悪夢だよな？

失敗例：患者を救えなくてへこんで、立ち直れずにアル中へ。
悲惨だ。でもありそつ。成功例よつよつほどありそつ。

オレが想像している間村人たちは不安げにざわめいていたが、村
長が咳払いをすると静かになつた。

「治療師よ、しばらく待つてもうらえんかな。その子はまだ一歳じゃ。洗礼すら受けておらん。祝福を受けてから決めて、充分間に合つだろ？」「

老婆はオレを見おろした。

ふん、と鼻を鳴らす。

「祝福なら、この子供はすでに持つてある。教会に寄りりず祝福を受けていると知られては、ますます厄介じゃな」

「なんだと……」「

一度おさまつたざわめきが、さつきの倍になつて復活した。

「それは……困つた。靈眼の治療師が言つのなら事実。これで教会に行つたら、異端を疑われるか」

あれ？ 異端つて、科学じゃないの？

オレがスカートの裾を引っ張ると、姉はしゃがみこんで答えてくれた。

「教会の教え以外のものは、全部異端なのよ。他の神や……妖精も」

「許されるのは精靈や天使くらいだな」

お見通しだと言わんばかりの老婆が追い打ちをかけた。

「うー（……降参）」「

がつくり頭を垂れ、それからオレは気がついた。

「おー（ちょっと待て。靈眼の人って、あちこちにこじるもの？ 街の教会にも？）」「

「いないね」

姉が通訳し、老婆が不機嫌に答えた。

ひつかからなかつたか、と舌打ちが聞こえました。ばーちゃん、

「アンタなんて意地悪な。

「よかつた、マグナス。気付かれないうつて事よね？ これで他の子と同じように洗礼を受けられるわ

まつとある家族。

……良かつたけどや、「あー」や「つー」だけで通訳できる姉もおかしいって、なんで誰も思わないの？ オレはそっちの方が気になるよ。

まあ、姉は洗礼済みだから、実は靈耳（なんてのがあるかビックリ）知らないけど）でも問題ないんだろ？ けどね。

次回、妖精ふたたび。

9 森には死体が落ちてこむ 1 (三歳)

自分の足で歩けるようになつて、食材集めがワソラソクアップした。

身近な野草ではなく、ちゃんとした山菜が採れるようになつたのだ！

というわけで、オレは現在フキノトウとタラの芽、フキを探つている真っ最中である。

「うーん、我ながらシブイ。
子供の食つもんじやない。

でもね、前の二つはてんぷらにすると美味しい（味付けは塩）、
フキは砂糖漬けにするといつ手がある。
暖炉の低い位置にオレ用の棒を取り付けてもらつたので、めんどくさい下処理から揚げ物・煮物まで、姉を煩わせずに作れるのがイイ。

ちなみにこの植物もこいつは固有の呼び名があるし、植生もちよつと違つ。

オレがフキノトウと呼んでるのは、アステリデスという名前。
もちろん誰も食べない。

でも食えるし。味変わらないし。基本部分が一緒なんだから、問題ナシ。

オレはまた一つ、雪をかぶつたフキノトウを摘んだ。

山にはまだ雪がうつすら残っている。

指先が赤くなっているので、息を吹きかけて暖める。

村は相変わらず貧乏で、うちも貧乏である。

謝肉祭で保存肉を使い果たしたので、今の食生活は極貧だ。

魔法の素質があるなら、きっとちゃんとありますがあると思うの」と、こんな生活に甘んじている。

科学は異端でも、魔法は教会認定である。

だったら好きに使えるはずなのに、村人はあまり使わない。

どうして? と訊いたら、「怖いから」と姉は答えた。

暴走が、だらうか?

練習して安定させればいいと思うのだが、そうではないらしい。

もう少し大人になつたら村長が話すから、と言われた。

でも、オレが静電気な雷撃サンダーを放つのは止められていない。苦笑されつつ受け入れられている。

よく分からぬい感覚だ。

「まぐなす。これは?」

ついてきたアリアが、適当な葉をちぎって見せる。

「それは取らずにおいとこうな。夏になつたらラズベリーがなるん

だけど、葉っぱがないと大きくなれない

やうだ。春になつたら、他の子供たちも連れてベリー摘みを企画しよう。

そのまま食べられるから、山菜と違つてウケるはずだ。

そんな事を考えながら山を歩いていた。

雪に埋もれた死体があつた。

びみや つと泣きだしたアリアの手を引いて、オレは一番近い家へと急いだ。

一足歩行はできても、走るのはまだ苦手だ。

「レティ・ワトソン」

『きやあ、嬉しい。マスターが呼んでくれたー』

ぽんつと現れたのは、頭にティアラを乗せ、ドレスの上にインヴァネスコートを羽織つた妖精だ。

オレの肩にのよこんと乗つてるので、高い位置で一つに結つた金の髪が、歩調にあわせて大きく揺れてくる。

『あのね、思うんだけどね、もつもつと頻繁に呼んでくれなきゃ寂しいの。他の妖精なんて人間界に入り浸りで帰つてこなかつたりするのに、この頃のマスターって、ぜんぜん頼つてくれないんだも

『ん

それはアナタが事件つながりの契約をしたからテス。もう警官じゃない、しかも子供にビーしろってんだ。

思いはしたが、ムダ口は後にする。

「死体があつた」

『うんうん。見たわー。クマさんにやられたのとは違つたわねー』

上機嫌なフェアリー・プリンセスは、首をひねつて後ろを振り返る。

「解決する前に探偵オレが死んだまよいよな？ 近くに人がないか探つてくれないか」

『まかせて』

透明な羽を広げて宙へと舞つた妖精は、魔法が当たり前の世界でさえキレイだつた。

思わず足を止め見送つて、はつとする。

アリアの手を引いて、オレははやくだけ急いで歩き出した。

目的の家は、そう遠くない。

「いませんかー」

オレはその家の扉をドンドン叩いた。

「へるをこ子供だねえ」

落ひかる雷撃』▽3。

まやお約束な出迎えをしたのは

治療師の老婆だった。

9 森にて死体が落ちてこむ 1 (二歳) (後書き)

お忘れかも知れませんが、アリアは、怪我をしていたコシュアの妹です。

マグナスより半年早く生まれますが、歳は一緒に二歳。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2046z/>

これはテンプレですか？ いいえ、銀のプレートメイル略して銀プレです
2011年12月16日17時55分発行